

博士學位論文審査結果の要旨

学位申請者氏名	今井 友子		
論文題目	源氏物語の人物造型—金剛醜女説話の受容について—		
論文審査担当者	主 査	滝川 幸司	㊞
	審査委員	中前 正志	㊞
	審査委員	坂本 信道	㊞

本論文で評価すべきは、『賢愚経』に原拠を持つ金剛醜女説話について、原拠はもちろん、その展開によって形作られた説話を数多くの資料に基づき跡づけて類型化し、その上で、『源氏物語』の醜女造型に応用した点にある。資料の整理は序論で行われ、付表として、本論文末にⅠ仏典比較表、Ⅱ金剛醜女説話比較表、Ⅲ馬頭夫人説話比較表が附載されている。これらの資料を縦横に用いつつ、『源氏物語』の醜女の人物造型を論じるのが本編（五章構成）である。

第一章「源氏物語における末摘花の造型—金剛醜女説話の受容について—」は、末摘花の人物造型について、金剛醜女説話の要素と構想が一致する点から論じる。『賢愚経』と末摘花・蓬生の両巻について、主人公の金剛と末摘花に、「出自が高い」、「顔が極めて醜い」、「人に姿を見せない」、「養護される」の共通点が見られ、蓬生巻では、源氏が「仏菩薩の変化の身」とされ、末摘花の変わらない誠実な心を知って宮邸を訪れるのは、金剛醜女の前に仏が現れる場面と対応するなど、末摘花の人物造型だけではなく、物語の展開に関しても金剛醜女説話が利用されていることを論じる。本章が本編の中核ともなっており、本章の論証によって、『源氏物語』の人物造型に、金剛醜女説話が用いられていること、また、物語展開にもそれが寄与していることが明らかにされる。以下の本編三章はそれを、他の醜女に応用して論じる。

第二章「源氏物語における玉鬘の造型について—『原中最秘抄』が示す長谷観音の靈験譚の関わり—」は、鎌倉時代の注釈書『原中最秘抄』が引用する長谷観音の靈験譚「馬頭夫人説話」を手がかりとして、玉鬘の造型について論じる。本章ではまず馬頭夫人説話と玉鬘の人物造型の関連が論じられるが、馬頭夫人説話の原拠は『賢愚経』の金剛醜女説話で、玉鬘の人物造型は、馬頭夫人説話に見られない金剛醜女説話の要素とも共通しており、馬頭夫人説話と『賢愚経』の要素が組み込まれているという。なお、玉鬘は、決して醜女ではないが、他人の目に触れずに育てられる理由が、「かたは」であるからだ表現され、醜女的要素が取り込まれている。実際の醜女ではなくとも、他人に見せられずに育てられるという理由に、物語内事実とは反しながらも醜貌が理由とされる点に、金剛醜女説話及びそれを原拠とした説話が踏まえられていると指摘

する。

第三章「源氏物語における「玉かづら」の意味―末摘花と玉鬘の造型を手がかりとして―」は、第一章第二章で論じられた、末摘花と玉鬘の二人のみに用いられる歌語「玉かづら」の意味について、金剛醜女と勝鬘夫人を同一人物とする資料により論じる。

第四章「源氏物語の指食いの女の造型について―「上陽白髪人」と金剛醜女説話の関わり―」は、帯木巻、雨夜の品定めに登場する、指食いの女の造型について、白居易「上陽白髪人」と金剛醜女説話との関わりを論じる。

以上、本編中の四章で金剛醜女説話と『源氏物語』の人物造型の関わりを論じるが、結章「敦煌変文と源氏物語の人物造型」は、本編のまとめとして、金剛醜女変文と『源氏物語』に登場する醜女を比較する。直接、変文が影響を与えたとは考えにくいけれども、日本に金剛醜女変文に近い内容の説話が存在した可能性について考察する。

以上、五章に亘る本編によって、『源氏物語』に登場する醜女の人物造型に、金剛醜女説話が利用されていたことを論証する。

仏教説話の影響などは、既に先行研究においても古くから論じられてはいるが、『源氏物語』に金剛醜女説話が利用されていることはこれまで論じられておらず、しかもそれが、『源氏物語』に登場する醜女の多くに関わっており、作者によって、どのように醜女の人物が造型されたのか、その過程が明らかになったことは、研究史上特筆されるべき成果であろう。

但し、すべてを金剛醜女説話に収斂させていく傾向が見られ、一部の類似認定については、説得力に欠ける面がある。この辺りは、さらに補強材料を求めるべきであろう。また、個々の論文は既発表のものであるが、博士論文として一本にまとめるに際しての内容の重複が目立った。この辺りは残念なところであるが、これまで指摘のなかった、金剛醜女説話の摂取を見出して、『源氏物語』の醜女全体を論じたことは、本論文のもっとも評価すべきところで、今後の展開が期待されるところである。

以上のことから、審査委員一同は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに適格であると判断する。